

ます。

「ヘエ、一寸お尋ねいたします。榊屋新兵衛さんはお宅様で」

「ハイ、何誰ぢやな、榊屋新兵衛は手前ぢや、開けて這入りなはれ」

「ヘエ御免、今日は……オ、叔父さんですか、御機嫌宜しう御座居ます、永らく御無沙汰いたしました、一度お伺ひせにや濟まぬと思ふて居りましたが」

「ハイ、何誰ぢやな、馴れ、しゆう仰しやるが歳を取ると眼かどが悪うてどもならん」

「ヘエ、お見忘れは御尤で、町内に居りました眼鏡屋の弟の鶴で」

「何んや、眼鏡屋の鶴さんやて、そら珍しい人ぢや、サアア掛けなされ……これ、お茶を持つと
すわ」

「何卒おかまいなく」

「イヤ、お茶は私が飲みますのぢや」

「ア、左様か」

「これ、眼鏡を持つて來とくれ、イヤもう歳を取るとあかんで、眼鏡が無いとどもならん……オ、ほんに鶴さんぢや、御機嫌さん」

「何時もお變り無くお達者で」

「ハイ、イヤ貴郎もお達者で結構、永い間何處へ行って、やつたんや」

「ハイ、東京へ行つて居りまして」

「東京へ、ア、そうか、行てやつてもう何年になるえ鶴さん」

「ヘエ、町内を出ましてから、ざつと十年になります」

「早いもんやな、十年になるか、そうして東京は何處に居てやつたんや」

「ヘエ、魚河岸に居りました」

「私も大分前に東京へ行つた事が有るが、彼方も随分變つたやろな」

「ヘエ、随分變つて居ります」

「夫やろうな鶴さん、私もモウ一遍行きたいと思ふてるねが、此の歳になつたらとてもあかん」

「此の坊ンは、叔父さんの坊んで……」

「鶴さん何を云ふのぢや、これはお前さんと寺子女達の悴新之助の兒ぢや、今ナ三人孫が出来てこれが一番兄ぢや、コレ小父さんおいでやすと云ひなされ……ハイもう七ツになります」

「そんな事は存じませいで、知つて居りましたら江戸繪の一枚も買うて参りますのに、これは不味い物ですが手土産の替りで」

「鶴さん氣の毒な……さよか頂きます。大きに有難うさん……コレ小父さんに何時も歌ふ唄を聞かし